

邊へ中人元口位悉く送れり十人斗小迄
御馬の傍小相従ふ西へ小川堀田加賀守阿部左衛門
阿部對馬守伊目權左衛門中根左衛門河内傳七左
六人大下馬の橋際並續き歩み御馬の口頭と神と
して中間も口位も不入も續くは久し橋造り
傳七下り橋の中程と阿部對馬守單鞋の緒とけ
續りんとしり内小後進し歩み百人の番所の茶の板
半出て雙後進下る中根左衛門下系橋の前出て
倒まき下るお月権左衛門殿と御玄園の傍出て御馬
下り下りさせりお月権左衛門殿と時御馬の口と取加賀守下系

橋の上御馬小走りぬせり御玄園出て
還御り首途告り單鞋とと捨く相従い御渡
と押し御馬の口と取加賀守下系と送れり
お奥進御儀は大人下馬り内進續き西へ橋の
白洲小踏姫とて稽く之事能く御書所勅者
之者は何事やんと怪みきり後小御沙汰有れ
し御用いかりの事と今日口口六ヶ敷と思召
還御り有る御書所供事人の強盛とためりて
御儀有るとして御馬の口と取加賀守下系と
御井邊渡りとして御馬の口と取加賀守下系と

軍の所を新造の積に何れの下より海を渡るや
其後人として可中と述ぶ味は書月と可先出有
は伊丹依る所伊丹の西に結回道して明日四時
未登 城可きの音四月廿中相觸依る時翌十日
小の佐才持人一人と疎く依る 城を以て海の上
小く委ぬ小記録も小大路の中にて大の下の
馬並の依はる人へ
皆が質も少る上後伊丹真進の依はる
阿部書後と百人の書所も少く板も進の依はる
阿部封する大の橋の中央の依はる

お同儀多治の玄関進の依はる
中根常任の下の書所も少く板も進の依はる
河内傳七人の信後進の依はる
右書月た 上院の備後との中をへる日台書
同中書諸人右書 城 伊丹書者之治を頃伊丹
西に海にあり小中人の以て伊丹進將伊丹元其支配と
集く潰波も作る城と下院と其城も少く書月た
日以て海の上の心掛長平くは替ひ一力一の時伊丹
可立方包成しと伊丹其志なく有る板も進の依はる
思下自人の以て海の上の心掛長平くは替ひ一力一の時伊丹

四代の手紙の形跡を以て表と見ゆる小之傳の中
を人とも相續するに其後との紙がはら 思ふこと
次小之傳の形跡相續する六人あり別紙に麻呂人と
り下

貞宗河腰也代令右左收 増加賀守正盛

行平河腰也代令右左收 阿部豊後守忠秋

信國河腰也代令右左收 阿部村島守重次

兼令 夜 中月後守清

同 三收 中根守清

同 水收 河内傳七

右六人の御名は 右出 御直河腰代令右左通
河内傳七

湯殿山幽霊之事

江戸馬場所小借宅に於てある所の妻病氣を以て終つと
差置薬服用してはもとも養生も相付終つ病死と其
夫あり者愁傷た方の小次文より七日く此回向か
いふ一日く愁傷止事いり一餘り小絶業亡妻菩提の
為諸國靈山へ系清せんを祈成仁也と云ふり音り
岸湯殿山とい亡人小次とて少人より一及亡妻小次とて